

四万十川（中筋川）流域では、マナヅル、ナベヅル、アネハヅル、カナダヅル、タンチョウ、ナベグロが確認されています。これらをシリーズで詳しくご紹介します。

ナベヅル〔鍋鷸、学名 *Grus monacha*〕

分類／鳥綱ツル目ツル科

分布／バイカル湖東部からアムール川河口域にかけてのシベリア南東部で繁殖し、冬は朝鮮半島や中国に出現するが、大部分は日本で越冬する。定期的な渡来地は鹿児島県出水市周辺と山口県周南市（八代地区）だけ。渡来記録のある地域は北海道、本州、四国、九州、および対馬で、四万十川流域によく渡来するものこのツル。

すがた／全長 96.5cm。額は黒く、それに続く頭頂までは暗紅色。頭から頸は白い。胸以下のからだは黒灰色。

生態／ナベヅルは、広い水田や農耕地、干拓地などでオス・メス 2 羽、または幼鳥 1～2 羽を連れた 3～4 羽の家族で生活します。雑食性で、草の根や種子、両生類、昆虫、魚類などを食べます。山間部の森林に囲まれた広大なシベリアの灌木林の点在する湿地で巣を作ります。

※参考：高知県（2002）『高知県レッドデータブック（動物編）』、山口県（2002）『レッドデータブックやまぐち』

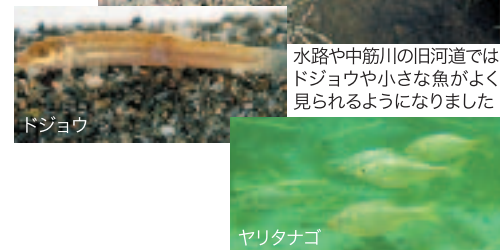


協働 河川工事で「ツルの里づくり」をサポート 連携 国土交通省「四万十川自然再生事業（ツルの里づくり）」 ～江ノ村地区（西谷樋門）での取り組み～

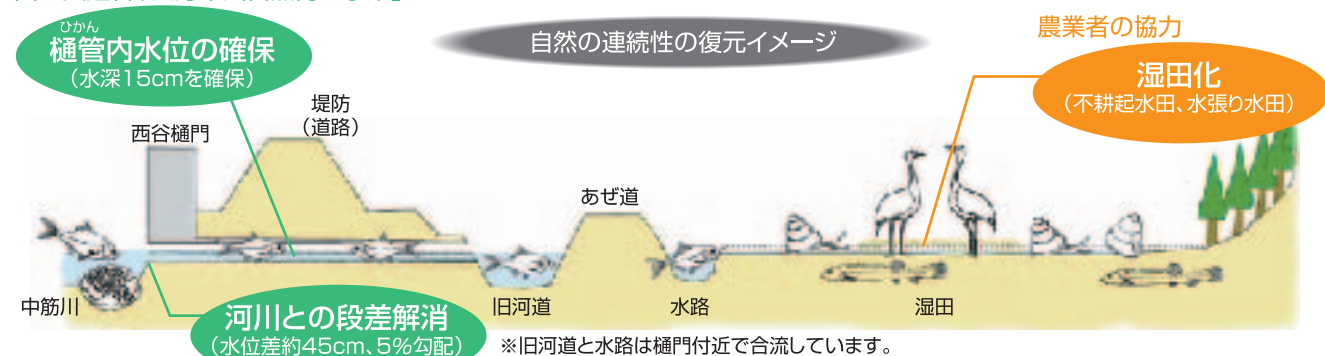
国土交通省中村河川国道事務所は、四万十つるの里づくりの会にオブザーバーとして参加し、河川管理者として、河川工事の面から「ツルの里づくり」の取り組みをサポートしています。

「四万十川自然再生事業（ツルの里づくり）」では、河川の連続性や湿地環境を再生させる工事を行っています。例えば、江ノ村地区の西谷樋門（水門）では、中筋川と流入支川や旧河道をつなぐ樋門の水の流出部と河川との段差を解消し、ねぐら・えさ場整備を行っている水田からの自然の連続性（水を介した生き物の移動経路）を復元させようとしています。

これによって、水生昆虫や魚類などの生息環境が増加し、それらを食べるツルのえさ場も増えると考えています。



国土交通省「四万十川自然再生事業」



※旧河道と水路は樋門付近で合流しています。

ツルを見かけたら お願い



四万十川（中筋川）流域で見られるツルは野鳥です。非常に用心深く常にあたりを警戒しています。特に光や物音に敏感で、一度飛び立つと遠くに飛び去ってしまい1羽も見られなくなります。自然のままのツルの生活をおびやかさないように、静かに遠くから見守って下さい。

四万十つるだよりに関するお問合せ

四万十つるの里づくりの会事務局

〒787-0029 高知県四万十市中村小姓町46 中村商工会議所内
tel: 0880-34-4333 / fax: 0880-34-1451
mail: naka10@cciweb.or.jp



四 万 十 つ る だ よ り



人と自然の共生する
「ツルの里」をめざして

Vol. 2 ●発行日／平成20年2月5日 ●発行／四万十つるの里づくりの会
http://www.shimanto-tsuru.com

※「四万十つるだより」内のツル類の写真の一部は、澤田佳長氏（野生生物環境研究センター所長）よりご提供いただいております。

ツルの里づくりで地域活性化を目指そうと気持ち新たに… 平成19年度総会を開催しました！

平成 19 年度総会が 10 月 5 日、中村商工会館において開催されました。

会議では、多和博嗣会長の挨拶の後、事務局（中村商工会議所）から、これまでの事業のあゆみについて報告がありました。平成 18 年度は、国土交通省や（社）農村環境整備センターの協力のもと、中山地区（四万十市）でのねぐら・えさ場整備や自然体験学習会などが行われました。

また、平成 19 年度事業計画も提示され、今年度から「セブン－イレブンみどりの基金」の特別指定助成を受け、江ノ村地区（四万十市）での整備を本格化していくことが決まりました。



久々に会のメンバーが勢ぞろい！



多和会長の挨拶（中央）

総会の会場で 四万十の鳥の専門家 澤田佳長先生（野生生物環境研究センター 所長）に聞きました！



総会で、平成18年度のツルの行動体系調査結果について説明する澤田佳長先生

—平成18年度のツルの渡来数は前年度の3分の1以下だったそうですが…

澤田先生：えさがなかったからでしょうね。平成 18 年度は稲作が終わるとほとんどの田で稲株を耕運機で細かく耕してしまいました。そのため、稲株から二番穂が出なかった。二番穂がないと、ツルは降下してもえさがいないものだから、すぐに飛び立ってしまうんです。

—だから、もみ撒きをして、人為的にえさを用意しているんですね。

澤田先生：そうです。ただ、えさ以外にも問題はあって、人が興味本位で近づいて、ツルたちを驚かしたために飛来しなくなった例もあります。「めずらしいツルの姿を写真に撮りたい」「近くで見たい」という気持ちもわからなくはないのですが、遠くからそーっと見守ってあげることが必要なんです。

—えさ場と安全な生活空間を確保してあげることがツル越冬の成功のカギといえそうですね。

澤田先生：そうですね。現在の「ツルの里づくり」の整備地は、仮に 200～300 羽飛んで来ても十分な面積です。今後も引き続きねぐら・えさ場の整備を進めて、ツルの越冬を目指してがんばりたいと思っています。